

会報

31号



函館の歴史的風土を守る会会報  
 №31 1989・2・10  
 発行所 函館の歴史的風土を守る会  
 事務局 函館市五稜郭町43-9  
 五稜郭タワー株式会社内  
 電話 (0138)51-4785  
 印刷所 双葉印刷 ☎53-7730番

1月27日第6回歴風文化賞の発表と  
 贈呈式を新春チャリティー・パーティーで行いました。

## 歴史的風土形成に寄与した 団体として函館ハリストス正教会

宗教法人 函館ハリストス正教会 殿

函館市元町3番13号

司祭 築 茂 三 郎 氏

貴教会は、開港まもない安政6年に、函館ロシア領事館の聖堂として建立されました。その後、大火による焼失、大正5年の再建をへて、ロシア風ビザンチン様式の聖堂は、今日までガンガン寺として親しまれてきました。

しだす重要文化財ハリストス正教会は、市民にとりましても、わが街の誇りとして、かけがいのない存在であります。

海に見える坂の上の教会、函館の町に異国情緒を醸

これも、市民共有の文化財として献身いただきました、教会の方々のご努力があつてのことと拝察し、ここに感謝の気持ちと敬意を表します。

## 函館の原風景として「鐘の鳴る丘」

### 宣 言 文

安政6年、開港とともに箱館に赴任した、ロシア領事ゴスケウィッチは、領事館の礼拝堂を建立しました。国の重要文化財ハリストス正教会の前身であります。今、この丘に立ば、東西の宗教建築が、一望のうち

におさめられ、異国情緒をただよわせています。函館の文化は、ここに芽生えました。

新函館の夜明けの鐘が鳴る、この丘を、「鐘のなる丘」と愛称して、函館の原風景と宣言します。

### 実行委員長あいさつ

実行委員長 若 山 直

第11回、函館の町並みを語る新春チャリティーパーティーの実行委員長に任命をいただき感謝にたえません。思えば今回の5つの歴風文化賞は個人的にも感慨深いものです。私は元町の「鐘の鳴る丘」で育ち、今も「ハリストス正教会」の隣に住み、「道教育大函館分校」の附属小・中学校に学びました。「函館ヒストリープラザ」と「BAYはこだて」のあたりは幼少時、格好のチカ釣りの場所で、特に七財橋のある堀割の奥に同級生の自宅があったため彼の家からタイコ橋の絵を描いたりして遊びました。現在経営している五島軒は今年が110周年ですが、明治12年創業時のコック長五島英吉は、幕末の五稜郭戦争の敗残兵として逃れ、ハリストス正教会にかくまわれ下僕として働くうちにロシア料理とパンの製法を学んだ人でした。

歴史的風土というものは我々が感覚として信じる

何らかの根拠。形あるものがなければ未来に残すことはできません。フランスの酒のみはよく「うまい酒をどんどん飲もう。そのうちに新酒がやがては古酒になる」と言いけすが、建物が生きていくには生かし続けていく為の補修が不可欠です。歴史的風土、建物、習慣を古くして常に新しい状態に保つには古さを守るための経済的裏づけが必要です。ヒストリープラザは倉庫業のカラをぬいで見事にピアホールに変身しましたが、この方法にも限界があります。ハリストス正教会と同じ立場では補修のできぬ多くの建物が残っています。歴風会の使命はいかにして残された文化遺産を真に守り、復活させ、発展させていくかにあります。個々の経済的努力の限界をのりこえて市民の総意で町並みを考えていく……歴風会の伝統は函館市民の伝統から生れ、新しい運動として定着してきました。今後とも次の世代にこの精神の在り方を引き継ぐための楽しい集いを皆様と共に開催し続けていくことを念じてご挨拶いたします。(五島軒社長)

## 教育大学函館分校教育資料館が 保存建築物として表彰されました

北海道教育大学函館分校 殿

函館市八幡町1番2号  
分校主事 鈴木正義氏

貴大学の教育資料館は、大正3年北海道師範学校の本館として建てられました。

昭和43年、改築に伴い失われる所を、学校や同窓会の方々为一体となり、正面玄関を中心に残す事に努力されました。

貴重な資料や卒業生の傑出した作品の收藏、展示館として活用されております。

長年に亘り維持、保全に尽くされた努力に謹んで感謝の意を表します。

教育大学函館分校は、大正3年4月9日に、北海道函館師範学校として、新入生80名を入れて開校されました。

その後昭和18年、官立北海道第二師範学校、戦後の学制改革により、北海道学芸大学函館分校として昇格し、昭和41年北海道教育大学函館分校と改称され、今日に及んでいます。

この建物は、大正3年に師範学校として産声を上げたときに、教室、管理部分として建設されたものであります。

昭和43年、現在の鉄筋コンクリートの本館にたてかえら

北海道教育大学函館分校  
教授 奥平忠志

今年度函館の歴史的風土を守る会の保存建築物として表彰を受けた北海道教育大学函館分校の「教育資料館」は北海道函館師範学校の本校舎の一部として大正3年4月1日建築工事竣工したもので、当時の本校舎は建坪813坪の木造2階建であった。

昭和39年から始まった新校舎建築は、この建物を含む旧校舎の解体を伴うものであり、新校舎の建築が進められる中、昭和43年にはついに最も古い創設期の建物が取壊されることが予定されたことから、学内及び同窓生からの強力な要請によって建物の一部である正面玄関部分を残し、教育資料館として教育・研究の施設に残されたものである。

国の古い建物を残すことは防災上の見地からも極めて困難であったことから、当時の分校首脳陣と同窓会役員の間で建物の利用についての綿密な計画が練られた。この計画の趣意として次のような内容が記されている。

- (1) 校舎改築に伴う記念施設の存置の要望に即応
- (2) 北海道教育史における本校の歴史的な位置とそれに伴う使命感の認識・継承に資する象徴標識設置の要望に即応
- (3) 学校史編纂事業の開始・継続に伴う資料の収集



朝日新聞函館支局提供

れるのにもない取り壊されるところを、学校や同窓会を中心に、同年4月に正面玄関をメインとして左右一窓分残す事に努力をされ、「教育資料館」別名「夕陽記念館」として大正期の洋風建築の威風を今に伝える貴重な建物です。

室内には、創立当時の学生の服装、大学の変遷、函館の町の移り変わり、そして学校長、主事先生の写真、卒業生の作品や記念誌など、傑出した作品が多く展示されている意義ぶかい建物です。

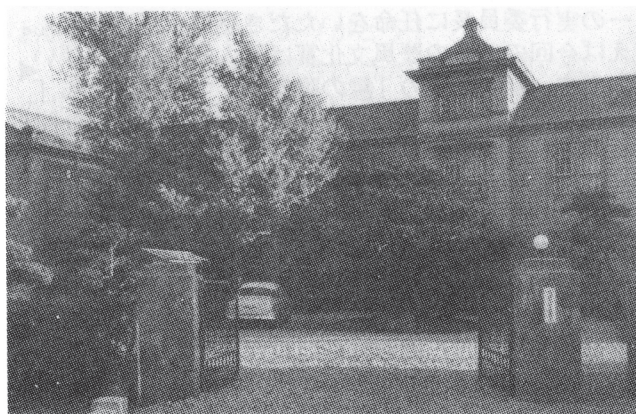
・整理・保存の要望に即応

- (4) 教育史研究における実物資料のもつ意義に基づき、教育資料の収集・整理・活用によって研究・教育に資すべしとの要望に即応

このような趣意書を文部省に提出し、認められた結果、正面玄関の一部を切離し、現在の位置に移転、保存したものである。建物の内部には保存の趣意に基づいて教育関係資料をはじめ分校の歩みを紹介する各種展示物、同窓生の作品・著作物等が展示されている。

なお、学内には、旧校舎の講堂が仮講堂として保存され、クラブ活動・授業などに今日も利用されている。

(当会顧問)



創建当時「開学30年」誌より

## 現代をかちとり、新しい歴史をつくる場として 再生建築物 2 件

金森商船株式会社 殿

函館市末広町14番12号

社長 渡 邊 恒三郎氏

明治40年代に建てられた、貴社のイギリス様式による煉瓦倉庫群は、港町函館の象徴であります。

このたび、倉庫業を行う傍ら、外観を保持し、内部空間に「函館ヒストリープラザ」として一大モール街を形成され、商業、文化の建築として、地域の活性化に貢献をされました。これは、歴史的まち並み保存の推進に与えた影響は大きく、その努力に謹んで敬意を表します。

この建物は、函館の人口が東北、北海道随一であった明治41年から43年にかけて、最も繁栄した時代に二代目渡辺孝平氏により建てられました。

この地域は、明治初期より、船場町といわれ、埋立て造成が最も盛んに行われたところで、ここは海深も十分に繋船にすぐれ、早くから荷揚げ、倉庫、造船所として発達してきたところであります。

この建物も明治40年の大火以降のものであり、イギリス積みによるレンガ壁の堂々とした、港町らしさを感じさせるものであります。

このたび、倉庫業としての業をおこなう傍ら、外観を保持



山口俊明氏撮影

し、「函館ヒストリープラザ」として、室内空間の思い切った転換を行い、函館の歴史と文化を愛する人に、愛される商品を、の目的で、ショッピングを楽しめる「クラシックモール」、明治31年、初代熊四郎が谷地頭に設立し「函館ビヤホール」の名にちなんで「函館ビヤホール」、函館の文化活動に提供しようとする多目的ホールとしての「金森ホール」、そして「写真回廊」としてのギャラリー、これら一連の商業文化建築への発想は、われわれ市民はもとより観光客にも再生の活力と意義あるステートメントを贈られました。

ここに敬意を表します。

株式会社 エヌアンドエス 殿

函館市豊川町11番5号

代表取締役 落 畑 憲 一 氏

貴社は、日本郵船が明治42年・45年に建てたフランス式による華麗な煉瓦倉庫建築を、このたび、外壁を保持し「BAYはこだて」として、ショッピング、レストランなどの商業建築に再生されました。

これは、歴史的まち並み保存の推進に与えた影響は大きく、その努力に謹んで敬意を表します。

この建物群は七財橋にたつて、左側を日本郵船倉庫2号館と言い明治42年11月に建てられたものであり、右側はその1号館と呼ばれ明治45年11月に建てられたものである。どちらもフランス式レンガ積みで、煉瓦造でも華麗な積み方として知られる。

この地は、安政5年ころ船匠島野市郎治により埋立てられ文久3年ブラキストンが一部を借り日本最初の蒸気力による機械製材所を建設した。

明治15年、三菱汽船はブラキストンの地権および製材所、付属建物を買とり、船荷役の進捗を図るため堀割工事と不燃倉庫群の建設にとりかかる。

この堀割の工事は英国技術者の設計、工事総督は三菱本社



山口俊明氏撮影

副社長の石川七財氏である。この名をとって「七財橋」となづけられた。

明治18年、「三菱汽船」と「共同運輸」は合併し「日本郵船」となる。いま、この建物は株式会社エヌ&エス社により「BAYはこだて」としてよみがえりました。

2号館のエントランスホールから入ると階段を昇りブリッジへ、堀割をはさんだブリッジを通り1号館に、階段をおりると中央にレストラン、右にショッピング街、左にオープンキッチンで調理する独特のスタイルの「函館料理のレストラン」などが設けられ、本格的なモール街となりました。

歴史的に意義のあるこの地域、この建物の再利用を図り、活性化されたことに敬意を表します。

## 重要文化財函館ハリストス正教会 復活聖堂昭和大修理

(財) 文化財建造物保存技術協会

麓 和 善

### はじめに

日本ハリストス正教会発祥の地に立つ教会として、また日本近代建築史上の名建築として有名な函館ハリストス正教会復活聖堂の修復工事が、昭和61年5月から同63年10月にかけて行なわれた。

この修復工事では、文化財修復の原則にのっとり単に破損部分を修繕しただけでなく、解体にもなってさまざまな調査を行ない、可能な限り建設当初(大正5年)の姿に復原した。

その成果は、完成した白壁の聖堂、内部のシャンデリア類や床の花ゴザ、および正門の鉄扉などによって具体的に確認することができよう。また、調査から復原への過程は、工事中の現場見学会や建築士会主催の講演会において随時説明してきたので、すでにご存じの方も少なくないであろう。しかし、広く一般市民、とりわけ函館を愛し、その歴史的風土の保存に強い関心を持たれている方々に、文化財修復の本質を、より一層深く理解していただくために、概要ではあるが、改めて今回の工事の要点を記すことにする。

### 1. 調査

文化財の修復工事は、その工程のうえから、前半の解体調査工事後半の保存修理工事に大きく分けられる。解体調査工事では、破損部分を解体しながら、そこに使われている材料やその加工方法などを見極める「仕様調査」、建物に残る痕跡や古い写真・記録などから建物の変遷を明らかにする「史的調査」などが行なわれる。そして、その調査結果を総合して後半の保存修理工事の詳細な実施計画が立てられる。したがって、この解体調査工事の成果は、工事全体の成果を大きく左右することになり、とりわけ重要である。そこで、まずこのような調査の具体例として、花ゴザとシャンデリアについて詳述しよう。

#### ① 花ゴザ

修理前、聖堂の床には花ゴザ3枚とカーペット1枚が敷き重ねられていた。これは、傷むたびに新しいものを敷き重ねていったため、下にあるものほど古く考えられる。しかし、現在残っている一番下の花ゴザが、建設当初のものとは限らない。初めの頃は、傷んだ古い敷物を完全に剥がし取ったうえで、新しいものに替えたかもしれない。この点を明らかにするには、床板に残る花ゴザの止め釘痕を調べる必要がある。花ゴザは周囲を釘止めされているので、その釘穴が床板に残っている。そこで無数に残る釘穴がどのゴザを止めたものかを確認するために、たとえば一番上のゴザ

を敷いたものは赤、二番目を青、三番目を緑というように、ひとつずつ釘穴をマークしていった。すると、残存する3枚の花ゴザを止めた釘穴のほかにも多くの釘穴が残っており、その数はほぼ花ゴザ1枚を止めるのに必要な数であることがわかった。つまり、花ゴザはこれまでに4種類敷かれており、残存する3種類の花ゴザはすべて後補であることが確かめられた。一方花ゴザを剥がしているときに、最下層の花ゴザの下から、もう一種類の花ゴザの断片が発見され、結局、これが当初の花ゴザであることがわかった。



(筆者撮影)

#### ② シャンデリア

当初のシャンデリアは、鐘や正門の鉄扉などの金属類といっしょに、戦時中の昭和17年に軍事供出された。このように全く失われてしまったものの復原にあたっては、古写真が有力な資料となる。もちろん、シャンデリアそのものを写した写真があれば申し分ないがそのような都合のいい写真でなくても、何かの記念写真の片隅に写っていることがあり、それが復原にあたっての重要な資料となることがある。そこで、そのような古写真を1枚でも多く集めるために、教会関係者から提供してもらうのはもちろん、新聞やテレビを通じて広く一般の人々からも募集した。その結果、約2

00枚もの古写真が集り、そのなかの数枚の写真をもとに、次のような方法で正確に復原することができた。

まず、部屋全体が写った写真をもとに、シャンデリア全体の大きさを割出した。大きさを割出しは、寸法のわかるものがシャンデリアと同じ位置(カメラからの距離が同じ)にあれば、それとの比較によって求めることができる。幸いに部屋全体が写った写真から部屋の中央、すなわちシャンデリアの真下(カメラからの距離が同じ)を求めることができ、そこに敷かれているゴザの幅(90.9cm)との比較によって、シャンデリア全体の大きさを求めることができた。

全体の大きさがわかると、今度は細部のデザイン・寸法が問題となる。部屋全体が写った写真では、シャンデリアが小さく、細部まではよくわからない。そこで今度は、部分的ではあるが細部が鮮明に写った数枚の写真をもとに、各部分のデザイン・寸法を割出していった。このようにして、全く失われてしまったシャンデリアも、非常に正確に復原することができた。



(筆者撮影)

## 2. 施工—伝統的技術の保存—

解体調査によって、各部分の仕様がわかり、また建物そのものの変遷が明らかになると、いよいよ保存修理に取りかかることになる。ところで、文化財建造物の修復では、単に目に映る形だけでなく隠れて見えない部分や、材料・工法にいたるまで、できる限り建設当初の状態を伝えることを原則とする。したがって、古い材料を大切にするのはもちろん、破損部分を作り直す場合でも、あくまで伝統的材料・工法を用いる。

伝統的技術がすでに失われつつある昨今、この原則を遵守することはたやすくはない。しかし、裏をかえせ

ば、いま伝統的技術の伝承に努めなければ、近い将来必ず絶えてしまう。伝統的技術の存亡は、ひとえに今日に生きるわれわれの姿勢と努力にかかっている。

このような見地からも、文化財建造物の修復では、伝統的技術によって施工するように努める。すなわち、建物の保存と同時に、伝統的技術の伝承もはかっているのである。

その最も良い例が、今回の工事の中心となった漆喰塗である。海草を煮て作ったのり、マニラロープや和紙をほぐして繊維状にしたすき、昔ながらの製法による石灰や蠣殻を原料とした蠣灰などを、現場で十分にこねる。この作業は骨が折れ、何でも機械に頼りたがる現代の職人からは敬遠される。しかし、このこねの段階で漆喰塗の成否がほとんど決ってしまうともいえるほど重要な作業である。こうして作られた漆喰を熟練の左官が塗り付ける。特に、美しく外観を飾るアーチなどの蛇腹と呼ばれる部分は、その断面形状にあわせた専用の引き型(コテに相当する)を左官が自分で作って塗り付ける。材料作りから完成まで、ほとんどが手作業である。この漆喰塗のほかにも高度で熟練を要する作業は多いが、それぞれの作業を建設当初と同じ方法で施工することによって、文化財が保存され、またそれを支える伝統技術が伝承できるわけである。

## おわりに

信徒にとって聖堂は「神の宮」であるという。周知のとおり、初代の聖堂が明治40年の函館大火で焼失したため、二代目の現聖堂は、永遠なる神の宮という願いがこめられて、煉瓦造で堅牢に作られた。資金調達にあたっては、「米の一握り」寄付運動を展開した地元信徒の努力があったのはもちろん、ロシアの篤信なる老夫人から多額の献金を得るなど、日露両国の信徒の信仰心が結集された。以来、この神の宮たる聖堂は、信徒によって大切に守られてきたが、近年になって、建築史的価値をも認められて、重要文化財の指定を受けた。そして今度は、この貴重な文化遺産を後世に永久的に伝えるという使命も加わって、大々的な修復工事が行なわれた。改めるまでもないことかもしれないが、この点を十分に理解しておいてほしい。聖堂が工事用のシートで覆われている間に、駅前のホテルや函館山のロープウェイなど、現代の技術を駆使した立派な建物が相次いで完成し、また金森倉庫群もヒストリープラザとして再生され、急速に函館の観光化が進んだ。その結果、建設当初の姿で蘇った聖堂も、これまで以上に観光客の目を楽しませていることと思う。修理を担当したものとしても、聖堂が多くの人に愛されることは非常に喜ばしいことであるが、あくまでも神の宮として、また貴重な文化遺産として永久的に守りつづけていかなければならない建物であるということをお忘れしないでほしい。

# 「函館の倉庫」

函館大学名誉教授 和 泉 雄 三

## 1. 臨海倉庫と内陸倉庫

1970年は 安保の年であり、大学紛争の最っ盛りの年であった。いま、各界で活躍しておられる40代の方々が若々しい大学生活をおくっておられた団魂の世代です。

石原裕次郎さんのもう一世代若い時代。

時代のうつり変りの節目が この年にある。倉庫業が 臨海倉庫全盛から、内陸倉庫の進出、札幌など、大都市の配送基地(物流センター)に重点が移ったのもこの頃である。

海運も 丁度、この頃から 長距離フェリーが進出した。倒産寸前の国鉄系の道南海運を、現在、日本フェリー界を代表する東日本フェリーの創立者 蔦井与三吉氏(稚内利礼運輸社長、当時北海道旅客船協会会長)が引受けたのは、1963(昭和38)年の時だった。翌年、苫小牧港が開業、東海道新幹線が誕生した。

国鉄が始めて 赤字を計上したのも、この年である。

時代の変化を敏感に映し出すのが タレントだとすれば、それを物の面で表わすのが、交通であり、港だといえよう。

函館では、倉庫業がそれを映し出す。

## 2. 普通倉庫と冷蔵倉庫

普通、倉庫といえば、何でも物を貯蔵できる建物を想像する。1887(明治20)年創業という由緒正しい金森倉庫が、入れる商品が激減してピアホールに変わったのは、函館倉庫業、ひいては、函館港湾の衰退を表現する。といえ、当然のこのように見える。でも、違うのだ。

倉庫業には、普通倉庫と冷蔵倉庫とがあり、普通倉庫は、確かに衰退したが、今や、駅から東の冷蔵倉庫の方は、全盛期にある。函館の普通倉庫営業所数19、47棟、79・645㎡、17社に対し、冷蔵倉庫業は、18営業所、183・157㎡と約2倍の面積を持つ18社(1987・昭和62年現在。北海道運輸局調)

## 3. 函館の普通倉庫

函館の普通倉庫は、その歴史の古さ、建物の壮麗さで小樽以上の格式を持つ。第一、金森、及能、相

馬、函館倉庫、安田倉庫というような、明治時代に創業した 然も 日本を代表する会社の 精魂こめた、つまり、金もかけ、人手もかけ、当時の技術の精髓ともいべき倉庫が、ずらりと立ち並んでいるのである。

我々のような経済学者が見ると、北海道経済史、日本経済史そのものを、眼前にする思いだが、建築家が見ても、又、経済史など全く関心のない観光客の若いお嬢さんが見ても、「わ!レトロ」。それぞれの人が、それぞれに感銘を受けるわけである。金森さんのように、ピアホールや、歴史記念館コーナーを設けるのも、意義のあることである。

## 4. 明治時代の函館

私は、西部の倉庫群を見ていると、一体この建物が建った明治20年代(1890年前後、19世紀末)の函館の街はどうだったのだろうか?と、つい、思いを馳せる。

ロンドンでシャーロック・ホームズが活躍し、函館では初代相馬哲平氏、初代渡辺熊四郎氏初代小熊幸一郎氏が経済界を代表した19世紀末。

元木省吾さんによると、この倉庫群のあった処は、西から西浜町~仲浜町~東浜町、船場町豊川町、真砂町と並ぶ岸壁のど真中、海運会社、海産商、問屋が軒をつらね、上品な商店街の末広町の東に色町で繁華街の恵比須町、銀座通りが連なり、昭和9(1934)年の大火迄、北海道経済を代表する町なみであったという。東浜町は、汽笛と仲仕の掛声、発動機の爆音で活気にあふれ、魚市場を控えて馬車、トラックの騒音が終日続く街なみであったという。函館山の上から、この繁華街を包む



(小林吉男氏撮影)

ように、栄、旭、相生、そして堀川、新川、千歳、高砂、大縄町と職人、日雇、労働者の長屋が連っていたという。

飛ぶ小鳥を落とすといわれた問屋街の豊川町の東隣り日魯のある真砂町は、造船所と鉄工所が密集し、職人の街でもあったという。

このあたりから駅迄は、笹谷浜という純然たる漁師の町だったとか。今は昔の物語りですね。

(函館大学前学長・当会顧問)

## 「函館市電あれこれ」

路面電車研究生 山 田 民 夫

### ＝雨の夜の最終電車＝

1978年(昭和53)年10月31日に軌道が一部廃止(ガス会社～五稜郭駅前間1.6キロ)となり、日中にお別れ式が五稜郭駅前の安全地帯で行なわれている。この風景は翌日の新聞各紙の市内版に記事となっているので記憶のある方もおられよう。

この日は小雨が夜になっても降っており、一部廃止が全面廃止の前途への危惧感をいただく私の心情にも似ていた。駒場車庫発の10系統の文字通りの最終電車は、交通局管理職員の他は、諸々の思い出を胸中に秘めた10人前後の乗客であった。親子二代軌道事業に関係した運転士は、終点折返しの五稜郭駅前を数回長声のタイフォーンを踏みしめて走り出した。ガス会社前のカーブを通過するや否や架線関係職員の架線切りが始まった。

翌日の朝は晴天で、ガス会社前から五稜郭駅前方向を見渡すと、くもの巣の架線の無い空が、ぽっかりと広く高かった。

昨夜の終電に乗ったことが夢かと一瞬錯覚におそわれ、次に空虚感が心にひろがっていく私の前を代替バスが走り抜けて行った。

### ＝ササラ電車の乗り心地＝

除雪車は、別名ササラ電車とも呼ばれる。吹雪の日でも、おでこ部分にライトがあるので遠目にも判別できる。車庫通いを続けているうちに面識をえた関係職員のはからいで乗ることが出来た。初詣電車が深夜2時頃まで走っていた頃のことである。早朝4時過ぎに車庫を出て、機械油が飛散しても構わない作業服スタイルで乗務員二人とともに乗りこむ。軌道の点検も兼ねての走行である。

積雪がない時はブルーム式ササラを回転させる必要もないため、単車特有のゴーンゴーンとした乗り心地である。もちろん乗務員と同様立ったままである。大門、駅前では、ネオンの輝きの中に若者達が街にあふれている。無粋なササラ電車を振り返る酔客の群れもあった。

かって下宿で徹夜し、都電の電車早朝割引往復乗車券(30円)を入手した学生時代の私を揺れるササラ電車の中で思い出していた。(当時電車片道20円であった。)

### ＝幻の記念乗車券＝

1954(昭和29)年7月函館市交通局から「北

洋博覧会記念乗車券」(電車片道券13円)が発行されている。しかし、市交通局発行による記念乗車券史を兼ねた『「記念乗車券10年の歩み」記念乗車券』(1971(昭和56)年12月)にも掲載されていない。現物は、市立函館博物館の郷土資料館(末広町)に時折陳列されている。それには函館市交通局贈となっている。それは他の乗車券類とともに保管されている。

1913(大正2)年6月に函館水力電気株式会社により電車が函館の街を走り初めたが、函館水電(株)その後の会社においても記念乗車券は発行されていないので、最初の記念乗車券としての光栄に浴すべきであるが、何故か忘れられている。いつの日にか「函館開港百年記念乗車券」(1958(昭和33)年7月)ともども陽の目を見させたいものである。

(チンチン電車を走らせよう会運営委員)



…五稜郭駅前にて…

(筆者撮影)

(次の停留場鉄道工場へ向う20系統525号電車  
撮影1978年10月廃止直前)  
右手電信柱に通称赤灯(五稜郭駅前電停表示)が見える  
この赤灯も小生宅に保存しております。

## 事務局だより

●1月27日<sup>㉒</sup> 第11回函館の町並みを美しくするチャリティーパーティー<sup>㉓</sup>を五島軒本店で開催いたしました。実行委員長は若山直さん、副委員長には渋谷知美さんをお願いしました。ご多忙のなかお引受け下さいまして感謝いたします。会員の皆様や多くの市民のご支援をいただき盛況裡に終了したことをお礼申し上げます。当日は函館のかけがえのない歴史的文化遺産について語りあい、長年に亘って町並みの保存、活性化へ貢献された方々に<sup>㉔</sup> 歴風文化賞<sup>㉕</sup>をおくりました。表彰文は別掲の通りです。記念品は芸術豊かな硝子工芸品です。明治館内ガラス工房、ザグラス・スタジオ・イン函館の代表水口議さんの作品です。トロイカ合唱団による<sup>㉖</sup> ロシア民謡<sup>㉗</sup>と小林洋子さんのバイオリン演奏により一層の盛り上がりがありました。ご出演ありがとうございました。感謝にたえません。

皆様のご協力によって得た益金は、函館ハリストス正教会修復の寄附と、当会事業推進のために使わせていただきます。

●第2回全国<sup>㉘</sup> ウォーター・フロント・サミットイン NAGK<sup>㉙</sup>が2月18、19日長崎市で開催されます。昨年第1回は神戸市で開催されまして参加は、函館、小樽、横浜、新潟、大阪、神戸、長崎の7港都市でした。今年は、東京、北九州、福岡、那覇が参加の予定です。若し参加希望の方がいましたら詳しくは事務局工藤まで。(51-4785)

### =会費納入のお願い=

61・62年度未納の方、よろしくお願ひします。

郵便振替一函館630

又は、拓銀昭和通支店 026-293-407

宛先は、函館の歴史的風土を守る会

住所は、函館市千代台町20-18

### チャリティー・パーティに御協力商社(順不同)は

次の通りです。心より御礼申し上げます。

棒二森屋・<sup>㉚</sup>今井・函館西武・ホリタ・魚長食品・函館ロープウェイ・イトーヨーカドー・長崎屋・函館魚市場・五稜郭タワー・第一食品・さいか・サッポロウエシマコーヒー・文雅堂・カメラのたねざわ・太田比古象・おしゃれ館・ニューショップつしま・市民生協・五島軒・かもめの水兵さん・平方亮三・割烹中井・テーオー小笠原

## 編集後記

今号の会報は歴風文化賞を中心に編集しました。

▶ 先づ、昨秋ハリストス正教会復活聖堂の復元工事を終え息つく暇もなく萩市へ赴かれ、同市で重要文化財の伽藍、鐘樓の修復にかかわっておられる麓和善さんに執筆をお願いしました。文化庁へ出さなければならぬハリストス修復関係のぼう大な報告書を作製するお仕事もあったのでしように……。そんな超多忙な麓さんと知っての原稿依頼でした。麓さんが、ここ函館でハリストス正教会修復に示された、並々ならぬ強い意志と豊かな知性、そして男のロマンを多くの人々に知ってほしかったからに他なりません。四季それぞれの美しさをたたえるハリストス正教会を訪れる度に私共はきっと麓さんを思い出すでしょう。

麓さん ご苦労さま そして本当にありがとう!

▶ 函館を象徴する倉庫を今回、歴風文化賞として、ほめさせていただきましたので、倉庫あれこれを和泉雄三先生をお願いしました。オカタイ論文の執筆なら自在の先生へ柔かいエッセイ風 よみ物を注文し、気骨が折れたのではと、恐縮しています。

ロンドンの街角をホームズ生みの親 ユナン・ドイルがうろついていた丁度同じ頃、函館倉庫業界の創始者たる紳商達が真砂町、豊川町界隈を闊歩していたのは……と実に楽しい空想を呼ぶ。そして教えられる事多き記事でした。多謝!

▶ 奥平忠志先生 山田民夫さん 若山直社長 夫々公私共にご繁忙のところ稿をお寄せ下さり感謝します。会報編集時毎度 写真を快よく提供して下さる小林吉男さん 今号は函館写真館の山口俊明さんにも大変お世話になりました。ありがとう!

▶ 歴風文化賞選考委員会は当会の運営委員の他、この方面での専門家により構成されます。毎年紅葉の頃諸々の下準備を終え本格的調査に入ります。

土・日曜日でなければできない現地調査と慎重な論議を重ね該当物件を決めさせていただきます。今回の歴風文化賞表彰文、解説文は豊山孝夫先生が幾度も足で調査して書きあげた苦勞の賜ものです。原風景は今田光夫先生 ハリストス正教会への表彰文は高瀬則彦先生がお書きになりました。

委員の皆さんお疲れさま。

(田 尻)